小児循環器診療 集約化と地域での分業のバランス — 地方都市の小児循環器医として —

愛媛大学医学部附属病院小児総合医療センター小児循環器部門

檜垣 高史

Adopting Efficient Job-sharing in Pediatric Cardiology between Specialized Hospital and Local Clinics for Improved Patient Treatment — A perspective of a Pediatric Cardiologist from a Regional City —

Takashi Higaki

Department of Pediatric Cardiology, Children's Medical Center, Ehime University Hospital, Ehime, Japan

2012年5月21日朝、月の影に隠れて太陽がリング状に輝く金環日食が日本国内で25年ぶりに観測された。今回の日食は、近畿地方では282年ぶり、東京で173年ぶり、愛媛県では、鎌倉時代以来767年ぶりの天体ショーとなった。天気予報では雲が多いとされていたが、空を見上げた人々の祈りが通じたのか、雲間から太陽が顔を見せてくれた。各地の小中学校や科学館などでは観察会が開かれ多くの人々が美しい太陽に酔いしれ、地元の小学校では登校時間を遅らせて、家族みんなでしばし宇宙の神秘を堪能した。

愛媛県は東部から南部まで約200kmの細く伸びた地形で、人口140万人の温暖でおだやかな小さな県である。人口は日本の約1%で、いつも思うことであるが、愛媛県全体を見渡すとそれは日本の1%のモデルと考えられ、愛媛で起こる事象の、およそ100倍のことが日本全体で起こっていることになる。年間出生数は、約12,000人、およそ130人の先天性心疾患の出産が予測される。心臓カテーテル検査は150件、カテーテル治療50件、AMPLATZER閉鎖15件、心臓手術100件、開心術60件であり、やはりおよそ1%にあたるが、これは、日本小児循環器学会、JPIC学会が目指す施設の規模としては、いろいろな施設認定基準を満たせるかどうかの最小単位である。県内で初めて心臓の手術が行われたのは、1973年で、その後いろいろな時代を経て、愛媛県の小児循環器医療体制は、2008年に愛媛大学医学部附属病院に集約された。

小児循環器診療において、治療成績を向上させていくためには、施設の集約化が必要であるとともに、医学教育、卒後専門教育、医療従事者への教育研修などが重要である。病院内に小児循環器部門が起動し始めると、重症新生児の呼吸循環管理をはじめとする集中治療、小児救急、小児外科疾患の増加などほかの部門の症例も増加し、それに伴って小児医療全体も活性化される。小児医療の充実により、学生、初期研修、後期研修、若手医師、看護師、コメディカルなどが小児医療に触れる機会が増えて、小児医療をめざすスタッフの増加、病院経営にまでも、その波及効果は大きく、病院全体の大きな財産となるように思える。

しかし、問題点や弊害や落とし穴もいっぱいあることに気づく。まずは病院内で生じる問題点としては、ICUやNICUなどの病床の不足や、カテーテルや手術棟などの病院全体のキャパシティの問題、他の部門とのバランスの問題、集約すると個々の仕事量は軽減されるかとの予想に反して、ニーズと業務量は増大して、マンパワーと能力とのミスマッチのため疲弊が生じてくる。カテーテルや手術を担当しなくなった病院では、診療内容の変化に伴いスタッフのモチベーションの変化、機能の低下や、収益の減少、研修・修練の場所も集約すると1つの病院に限られ、他の病院では経験できるチャンスが小さくなり、これは学生や、研修医の経験や教育にも影響する。

ある記事に出会う。『良いシステム』とは？ …『バランスのとれたシステム』であると明言されていた。さまざま要求や要望を、どう集約してバランスを保って実現するかが重要であるが、それぞれの要求は相反していることが多く、どちらかの要求を満たせば必然的にもう一方の要求は満たされないのですべての要求を完全に満

たすことは、物理的に不可能である。また、すべての要求を均等に保つことが必ずしも正しいわけではないとも述べられていた。適当なバランスをとるしか道がないことを、システムに関わるすべての人に理解してもらえるように努力することが最も大切なのかもしれない。

集約されてから4年が経過した。瀬戸内海の小さな船は、小回りを効かして、うまく変化しながら、迷走せずに航海することができるかどうか？ 子供たちはもちろん、スタッフみんなの笑顔が増えることが一番大切である。壮大な宇宙の天体ショーが繰り広げられる中、とてもちっぽけな悩みではあるが、バランスを保った集約化は、子どもたちの幸せにつながると信じて、情熱を持って小児循環器診療に携わっていくことができれば、これほど幸せなことはない。